

全都覺醒賦

北原白秋

青空文庫

上

静かにすゝむ時の輪の

きしり

軋つたへて幽かにも――

はかう ことり

白光、小鳥にゆるゝごと

あす

明日の香ゆらぐ夢の浪

うすむらさき

薄 紫にたゞよひて

しらほは

白帆張りゆく霊の舟

まろ

円らに薫る軟かぜの

ちさと

千里の潮の楽の音と

ひと いぶきちから
人が息吹は力ある

いのちの韻、永久に
しらべ とこしへ

血の脈 搏と大閨の
みやくはく おほやみ

沈黙やぶりに響くまで
しづま ひび

神澄みわたる雪の夜の
しんす ゆき よ

聖きひと夜を神秘なる
きよ よ くしび

天の摂理と黙示との
あめ せつり もくし

悟うるべく厳かに
さとり おごそ

書万 巻の廬をいでゝ
ふみまんぐわん ろ

雪に清しき頬をうたせ
ゆき すゞ ほ

我、鶴 のよそほひに
われ かくしやう

鵝毛がもうみだるゝ玉階たまはしを

木々き々の白彩しらあやすりぬけて

台だいにのぼれば雲霽くもはるゝ

そらそら 金沙きんさの星月夜ほしづきよ

あふけば諸辰しよしん 十二宿じゆうにしゆく

銀ぎんの瓔珞やうらくかゞやかに

宝座みくらをめぐる天宮てんきゆうの

靈彩れいさい高く、端嚴たんごんと

華麗くわれいを尽くし真無量しんむりやう

善美ぜんびまつたく整ととのへば

燦爛さんらんとして聖天そらに満みつ

永劫とは ひかりの光明よろこびと歡樂に

頌歌しやうかあふるゝ微妙いみじさと

香華かうげみだるゝ眩まばゆさに

渴かつぎやう仰あ熱ひざまつく跪ひざまづき

涙なみだのごひてさらにまた

燃もゆる瞳ひとみをめぐらして

闇やみに下界げかいをうかゞへば

広かうりやう量むへんたゝまろ無辺むへんたゝまろ啻ただ円まるう

包つゝめぐみ繞めぐらす雪ゆきぎぬ絹ぬの

無塵むじんの衣ころも、水みづの帶おび

無垢むくしやうじやう清じやう淨じやうのしろ銀がねの

ふすましらあや
衾白彩ひきかつぎ

たと
譬へば、仏陀、無憂樹の

栄光の花ふる瑞かけに

蘇生淨化の果をひそめ

いま寂滅の落暉を

瑞雲くだる白蓮華

諸天諸菩薩比丘比丘尼

優婆夷優婆塞うちめぐる

蓮座にかほる大菩提

拈華微笑の尊とさに

しばし涅槃に入ることく

いと安らかにやす おごそに厳かに

あゝ天あまが下した、天あまぐもの

そぎたつきわみ、た暈なほる

あをがきやま やまなみ
青垣山の山脈の

むか伏ふすかぎり、やほしほ八百潮の

潮しほの八百路やほぢの冲津波おきつなみ

辺へにたつかぎり、ほくに秀つ国の

権威ちからと光栄さかえつかさどる

ぜんと みれいにひやくまん
全都の偉霊二百万

こぞ率つて白日ひるの戦闘たゝかひの

その激甚げきじんと繁雑はんざつに

痛み傷つき倦み疲れ
いたきずうつか

闇にしばらく——白雪に
やみしらゆき

大傘かざし、深みどり
おほがさふか

褪せず枯れざる驕慢に
あかたかぶり

白日、天の日あひしらひ
まひるあめひ

夕、月の輪貫きて
ゆふべつきおらぬ

夜天の宿を支へつゝ
やてんしゆくさゝ

世の盛衰をひやゝかに
よせいすい

千歳の暦ひるがえし
ちとせこよみ

神さび立てる常盤木の
かんときはぎ

古るき匂にたゝずみて
ふるきにほひ

更さらにすかせば眼めに暗くらき

九く百ひやく九く町ちやうの静しづまりに

柳やなぎやなぎの家いへを守もり

冷つめたう光ひかる大路おほぢの灯ひ

小路かうぢは暗くらし、病人やまうどの

夜よるの恐怖おそれに血ちも冷ひえし

頬ほに沁しみ照てる燭しよくの火ひか

小窓こまどを洩もれて青あを白しらう

一いつ点てん二点にさゆらげる

聴きけば異たつみに、聖しやうだい代のの

新しんりやう領りやうかけて三千里さんぜんり

ふるうみ　にせんり
古海めぐる二千里の

やみ　ひ　もとよも　み
闇の日の本四方に見て

ちんご　わうじやう
鎮護まします王城の

よ　いま　えいへい
夜を警しむる衛兵が

つが　ことば　ふるひ
番ふ言葉も震帯び

やす
「休め」「かしこし」「寒し」「いざ」

こえ　ときをり
「さらば」の声の時折に

たいら　やはらぎ
さては安寧と平和に

いち　ゆめ　まちく
市の夢守護る町々の

じゆんら　つゑ
巡羅が警杖もねぶたげに

ちしん　ほねこほ
ひゞく地心の骨凝り

かくていよく更けゆけば

遥か水澄む大川の

魚氷にのぼる勢も

夜の大気の寒冷に

輪波耳うちひぐくほか――

大地静かにふしまろび

一夜のなかに蘇る

生存の気と活動の

大なる力、憧憬と

希望の熱情、満ち足るふ

夢に齎かせ、天ひぐく

高き呼吸と響音と
たか こきう きやうをん
 進歌の律呂譜と納め
しんか りつりよふ をさ
 宮闈として眠るかな
たゞげき ねむ

下

誇る可きかな常闇に
ほこ べ とこやみ
 長き沈黙を圧したる
なが しづま あつ
 権力を驕るほゝゑみに
ちから おご
 いまはた、呼吸に世を甦生す
い き よ かへ
 巨人のごともうなづきて
きよじん

我^{われ}、鐘^{しやうろう}楼^{ろう}によちのぼり

夜^よは余^{あまり}ありとく醒^さめよ

全^{ぜん}都^との靈^{れい}よ、活^{くわつ}動^{どう}の

一^{いつ}指^しに天^{そら}を覆^{くつが}へす

威^{いき}勢^{ほひ}しめせと大^{だい}撞^{しゆ}木^{もく}

闇^{やみ}にひと振^{ふり}、渾^{こん}心^{しん}の

力^{ちか}らをこめて鐘^{かね}撞^つくや

響^{ひび}殷^{いん}々^く、澄^すみわたる

大^{たい}氣^き揺^{ゆる}がし乱^{みだ}るれば

鳥^{とり}は驚^{おどろ}き友^{とも}をよび

緑^{みどり}天^{てん}蓋^{がい}ゆるがして

もうち みだ 百千に乱れ、 白銀の

えびせ 簾背に負ふ 神将が

ひ 引き番へ射る 千束矢の

しらは 白羽のごとく 光射し

しうん たな 紫雲揺曳びく 九重の

おほみや 大宮めぐり 鳴きかはし

もや 靄の 御幕 ひきかゝげ

ひがし 東をさせば 天津宮

やみ ゆめど 闇の夢戸を押ひらき

ひ かみ いま日の神のいでましに

ひかりろこま 光白駒、 飛ぐるま

よろづさかえ 万の栄光、千々ちゞの彩あや

も、百の照姫てるひめ従へて

しろがねわ 白銀の輪こぎしりの小軋こぎしりに

くもあやわ 雲は彩湧ときく時をのせ

まづほのしろ 灰白しのゝめむ東雲を

そらう 天に薄するゝ星ほしくづの

ひかりごんじや 光の権者、靈清れいきよく

ちよみがきやうおん 地に蘇おんる響音の

かすさ 幽かに更らさにひそやかに

ちから 力こもりぬ、ほの／＼と

あさけきり 朝明の霧ゆるに動ぎつゝ

くひやくくちやう
九百九町はやはらかに

さ
醒むるよ。嘗^かつて夜^よを高^{たか}み

あめ
天ゆくだせし洗^{せん}礼^{れい}の

ゆき
雪に五濁^{ごぢよく}をそゞげばか

ろくこんきよ あき
六根清く晶らかに

りく ほうど げん
離垢の法土を現^{げん}ずるよ

あさ きあさ こえ
されば朝の気朝の声

きよ さは
清くすゞしく爽やかに

みづ りん は
水に輪うち波をつたへ

やま こまく
山の鼓膜にひゞくかな

ひ もと かん
それ日の本は神ながら

神かんづまります古国ふるくにの

秀真ほづまの国くにの朝あさぎよめ

四方しほう清すずしき宮霧みやきりに

烏帽子えぼし、水干すゐかん白彩しらあやの

禰宜ねぎが拍手かしはで、寒祝詞かんのりと

朗ほがらに澄すむや神殿しんでんの

大気たいき森しんたり朝神樂あさかぐら

はや鑿とうく々とうちいづる

時ときに聖ひじりは先せん覚かくの

慈眼じがんめぐらし数珠じゆずく操りて

うつや鉦鼓しやうこの律幽りつゆうに

霧にむせびて三^{さん}宝^{ほう}の

清^{きよ}きはこりは雲^{くも}に入り

澄^すみて菩提^{ぼだい}をさそふべう

伽藍^{がらん}の朝^{あさ}は磬^{けい}の音^ねに

はた鐘^{かね}の音^ねにおのづから

清^すし浄^{じやうど}土^どのかしこさを

涙^{なみだ}にあふぐ市^{いち}びとが

耳^{みみ}をよぎりてあきなひの

声^{こえ}はなやかに、辻^{つじ}々の

車^{くるま}の軋^{しり}、鈴^{すず}の音^{おと}

足^{あし}駄^だ、華^{はな}靴^{くつ}、雪^{ゆき}に鳴^なり

繁しげく急せ忙わしくなりゆけば

いまか市場いちばは武蔵野むさしのの

果実このみ、青物あをもの、北国ほつこくの

紅あけは林檎りんごに、極きよく熱ねつの

禾木くわぼく、花はなぐさ、花はなたまき

彩あやに人ひとよぶ賑にぎわひに

美うつくし子こらは入いりみだれ

朝眼あさめすゞしく惑まどふらむ

さては魚河岸舟うをがしふねつくや

江戸えどは勇健いさみの肌はだの彩あや

美うつくくし脛すねに手てに活いきむ

魚うをの幾いくせん千澆はつらつ瀨うと

銀ぎんの鱗うろこをひそらかし

海うみの新香にひかを飛とばすらむ

こなた森もりなる学がく堂どうの

雪ゆきの門かど守もり、ねそびれし

寢惚ねぼけがほなる笑せう止しさに

問かんぬぬきけば夏なつ海うみの

潮うしほのごとくひたよせて

乱みだれ入いる子この後うしろか

幸さちと希望けもうに光ひかる見みよ

と見る真紅しんくは朝あさぞらの

雲くもを彩いろどり譜ふをそめて

霧きりにながるゝ美うつくしさ

時ときいま、百ひやくの工こう場やうに

軋れきろく輾おとの音おとうまるれば

黒煙けむりのぼるよ笛ふえな鳴るよ

朝あさはいよく新あたらしく

生いき存ちからの力をどよもして

霧きり晴れゆけば遠とほ海うみの

朝あさの青あをはや、眉まゆせまる

秩父ちちぶ遠山とほやま、筑波つくば山やま

富士ふじ、白雪しらゆきの冠かんむりに

玲瓏^{れいらう}として玉^{たま}のごと

朝^{あさ}に臨^{のぞ}むよ。この都^{みやこ}

あはれ不滅^{ふめつ}の精^{せい}力^{りよく}に

歎^{よろこび}喜^{さち}あれよ幸^{さち}あれよ

驕^{たかぶり}盛^{はえ}あれよ光榮^{はえ}あれよ

いま悠^{ゆう}々と高^{たか}照^ひり

驕慢^{きやうまん}榮^はゆる天^{てん}日^じは

時^{とき}の白駒^{しらこま}駆^かりすゝめ

白銀^{しろがね}の鞭^{むち}、金^{きん}の馬具^{ばぐ}

輪^{りん}車^{しゃ}軋^{きし}らす光^{かう}道^{どう}の

十^{じつ}方^{ほう}かけて煌^{かう}々と

な 投ぐる金の矢銀の矢に

かくやく 赫奕として照りかへす

あさひかりあら 朝の光に新たまる

みやここえ 都の声よ。戛然と

さうぜん いま噪然と囂然と

よみがへくわつどう あら蘇る活動の

ちから ひ 力、火となり熱となり

でんりよく 電力となり、生類の

ち 血となり燃ゆる肉となり

こゝ 茲に全都の繁栄と

たか 高き権威を永久に

ひと まどか
人を円満にすゝむると

せんまん こえざつぜん
千万の声雑然と

つひ あ みなぎ
遂に溢ふれて漲りて

てんぶつら はげ
天部貫ぬく激しさに

ち はへ ろくしやく
あゝ地に匍匐る六尺の

たんく せいりよく
短軀にひそむ精力の

いだいふめつ み
偉大不滅をまさに見る

こうだい あさ じゆか ひと
高台の朝、樹下の人

さんたん せいしゆん
あゝ讃嘆と青春の

かんるい
感涙せちにうちむせぶかな

青空文庫情報

底本：「白秋全集 1」岩波書店

1984（昭和59）年12月5日発行

底本の親本：「早稲田學報第百拾貳號」早稲田學會

1905（明治38）年1月1日発行

初出：「早稲田學報第百拾貳號」早稲田學會

1905（明治38）年1月1日発行

※初出時の署名は「[#割り注] 早稲田大学「#改行」高等予科
文科生「#割り注終わり」北原隆吉（射水）」です。

※「蘇《よみかへ》る」と「蘇《よみがへ》る」、「神」に対す

るルビの「しん」と「かん」と「かみ」、「白銀」に対するルビの「しらがね」と「しろがね」の混在は、底本通りです。

入力：フクポー

校正：岡村和彦

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

全都覚醒賦

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>